

野球用語「降板」の意味・用法の一般化

The Generalization of Meaning and Usage of Baseball Terminology *Kouban*

シギット・スギアルト

Sigit Sugiarto

摘要

This paper is focusing on the generalization of meaning and usage of baseball terminology *kouban*. Originally, *kouban* is used as a baseball term which means "in baseball, the pitcher is leaving the mound in the middle of the game and replaced by another pitcher." However, according to some dictionary descriptions and prior study, it is confirmed that *kouban* could also be used to express "(a person is) to retire or to quit from a positions/roles" on contexts/fields other than baseball. The main purpose of this research is to observe the expansion process of *kouban*'s meaning and usage, as part of the study to analyze the generalization of meaning and usage of sports terminology in general.

The object of this study is the actual usage of *kouban* on Yahoo *Chiebukuro* (a Japanese version of Yahoo Answer) postings, and the actual usage on The *Asahi Shimbun* newspapers article databases, with the purpose to observe trend orientations in actual daily usage and to observe the records of the expansions process historically. Based on the observation results, this research has determined that *kouban*'s generalization of meaning and usage has also expanded to various contexts/fields other than baseball after at the beginning being used as a metaphorical term to express "to retire or to quit from a positions/roles" in politics related article headlines on the 70's. From the context/field of 'politics', it is expanded to the context/field in the order of 'media/entertainment', 'sports in general' (sports context/field other than its original meaning and usage), and 'economy/management'. It is also confirmed that *kouban*'s is not only used to express "a person to quit from a positions/role", but it could also express "a non-human, such as things or organizations/company to quit or to withdraw from a role/participation." This study also confirmed another usage of *kouban* on the context/field of 'sports in general' in particular to express "a person to completely retire as an athlete".

キーワード 野球用語 降板 一般化

1. はじめに

本稿は、日本で最もポピュラーなスポーツの一つである野球用語の意味・用法の一般化について考察するものである。例えば、野球用語の「続投」「降板」「登板」といった語は、いずれも投手に関連し、試合の場面で使われる。本来「続投」は「投手が他の投手と交代せずに、ひきつづいて投球すること」、「降板」は「投手が試合の途中で交代して退くこと」、「登板」は「投手が試合に出場すること」という意味を表すが、本来の意味・用法だけでなく、異なる場面・文脈で用いられることが少なくない。これらの3語が一般化した用法でどのように用いられて

いるのか、以下の例文を見てみよう。

(1) “**続投**” の自民幹事長

党内を二分するほどのデット・ヒートのすえ、田中角栄氏が保利茂官房長官をおさえて、自民党の“大黒柱”である幹事長に留任した。(朝日新聞(朝刊)1970年1月13日)

(2) テレビ司会者の大橋巨泉が、この4月から3本のレギュラー番組のうち2本を**降板**する。

(朝日新聞(夕刊)1990年1月22日)

(3) 人事にはグループの東芝機械による87年の「ココム（対共産圏輸出統制委員会）事件」が影を落としたといわれる。同社の工作機械がソ連に不正輸出され、貿易摩擦と相まって米国の「日本たたき」の象徴になった。当時社長の渡里杉一郎は在任1年余で会長の佐波正一とともに引責辞任。渡里の同期の青井が登板する番狂わせが生じた。

(朝日新聞(朝刊)2016年4月9日)

上の(1)~(3)の例文では「続投」「降板」「登板」は明らかに野球とは無関係の文脈で用いられていることが分かる。(1)の「続投」は政治の文脈において、政党の幹事長という地位・職務を交代せずに引き続き務めることを表し、留任と同じ意味であると考えられる。(2)の「降板」はメディア・エンターテインメントの文脈において、テレビの司会者という役目・役割を辞める(降りる)ことを表し、(3)の「登板」は経済・経営の文脈において、社長という役職に新しく就くことを表している。

本稿では、このような野球の投手に関する用語の意味・用法の一般化について分析することを目的とした研究の一環として、「降板」という語に焦点を当て、考察を行いたい。

2. 先行研究

野球用語である「降板」の意味・用法の一般化について言及した先行研究には靱山(2006)がある。靱山(2006)では野球の投手・投球に由来し、日常使われる表現として「登板」と「降板」があるとされている。靱山(2006)はこれらの語の本来の意味を確認し、「登板」は「投手として試合に出場すること」であり、「降板」は「登板していた投手が、試合の途中で退くこと」と述べている。また、一般化した意味・用法として、「登板」は「新たに政党の代表になること」「新たに社長に就任したこと」などを表し、「降板」は「テレビ番組のキャスターから降りること」「テレビドラマの役から降りること」を表すとしている。「登板」と「降板」は、野球の投手に関する本来の意味の場合には対を成すものであるが、野球以外の人間の営みについて用いられる場合は、「役目」に違いがあるとされている。「登板」は「首相」「社長」のように「重要な役目やポストに就くこと」であり、「降板」は「ドラマや舞台の役」「テレビ番組(のキャスター)の役」などのように、「多くの人から注目される役に就いている人が、その役から退くこと」とであると述べられている。

以上、「降板」についての先行研究を概観した。このように先行研究では一般化した意味・用法について記述があるものの、現代日本語共時態での指摘にとどまり、一般化の過程については扱われていない。従って、本稿では、「降板」の意味・用法の一般化、及び「降板」の使用状況の変遷について明らかにしたい。

3. 研究対象と研究方法

本稿では、「降板」の用法の変遷と一般化について明らかにするために、まず、4節で辞書記述を確認し、様々な辞書において「降板」がどのように記載されているかを観察する。

次に、5節では日常的なコミュニケーションの運用面として、新しい用法も表れやすい『Yahoo! JAPAN 知恵袋』(以下『Yahoo 知恵袋』)¹での用例を観察する。調査対象は2004年4月1日(サービスが開始された日)から2012年12月31日までのデータとする。

また、6節では、経年変化を追うことができる媒体として、朝日新聞の記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』を扱う。調査期間は朝日新聞が創刊された1879(明治12)年1月から1999(平成11)年12月31日までとする²。考察の方法として、まず朝日新聞における「降板」が用いられた記事(用例)を抽出する。収集した用例から、「降板」の意味・用法がどのように一般化してきたのか、どのような意味・用法を有しているのかをもとに分類する。次に、「降板」の変遷においては、各分類における「降板」の意味・用法の出現した記事(用例)を考察し、「降板」がどのように新聞に出現しているのか、分類・文脈別による「降板」の出現順を手掛かりにして、一般化の要因となった文脈を明らかにする。

4. 辞書記述による「降板」の意味・用法

本節では、まず辞書記述によって「降板」の意味・用法を確認する。

(4) a 『日本国語大辞典第二版』(2001)

野球で、投手が他の投手と交代してマウンドをおりること。

b 『精選版日本国語大辞典』(2006)

①野球で、投手が他の投手と交代してマウンドをおりること。②(転じて)役を降りること。「主演女優が降板する」

c 『広辞苑第六版』(2008)

野球で、投手板から降りること。投手が試合の途中で交代して退くこと。

d 『大辞泉第二版』(2012)

①野球で、投手が交替させられてマウンドを降りること。②担当していた役割を辞めること。「病気のために人気番組の司会を降板する」「降板した女優の代役が決まる」

以上のように、辞書によって「降板」の意味・用法の記述にはゆれがあることが分かる。『日本国語大辞典第二版』と『広辞苑第六版』の記述では、野球の場面での「降板」の本来の意味のみ記載されているのに対し、『精選版日本国語大辞典』と『大辞泉』の記述では、本来の意味に加え、「担当していた役割を辞めること」という意味が記載されている。辞書への記載の有無は、新しい意味用法の一般化の指標となるが、あくまで指標の一つということになる。本稿では、新聞および日常的なコミュニケーションを反映したインターネット上における事例にも観察を広げ、「降板」が野球の場面・文脈で本来の意味を表すのみならず、野球以外の場面・文脈では、「役目・役割を辞める(退く)こと」を表すことができると確認した上で、その拡張がどのような過程を経たか、観察したい。

5. 『Yahoo 知恵袋』における「降板」

新聞での様相を見る前に、まず、日常的なコミュニケーションの中で、一般化した「降板」がどのような分類・分野で見られるのか、どのような用法を持つのかを観察する。インターネット上で利用者が投げかけた質問とそれに対する回答からなる問答形式の『Yahoo 知恵袋』のデータには、17個の大分類がある³。各分類における「降板」の検索数を以下の表1にまとめた。

表1 各分類の「降板」の検索数

番号	大分類	降板の件数
1	エンターテインメントと趣味	10793
2	暮らしと生活ガイド	79
3	インターネット、通信	30
4	健康、美容とファッション	94
5	ビジネス、経営とお金	20
6	生き方と恋愛、人間関係の悩み	62
7	子育てと学校	25
8	職業とキャリア	18
9	マナー、冠婚葬祭	17
10	ニュース、政治、国際情勢	610
11	教養と学問、サイエンス	77
12	スポーツ、アウトドア、車	3569
13	地域、旅行、お出かけ	22
14	スマートデバイス、PC、家電	12
15	Yahoo! JAPAN	29
16	コンピュータテクノロジー	4
17	その他（ギャンブル等）	130
	合計	15591

表1から分かるように、「降板」の用例数は合計15591件で、全分類において現れているが、件数の最も多い3分類に注目したい。件数の上位3分類は“エンターテインメントと趣味”が10793件、次に“スポーツ、アウトドア、車”が3569件、続いて“ニュース、政治、国際情勢”が610件を占めている。

まず、最も用例数の多い“エンターテインメントと趣味”の分類における用例を詳細に観察しよう。10793件の内訳を小分類にもとづいて見ると、テレビ番組・ドラマ・映画の役の「降板」が9413件、テレビ・ラジオのアナウンサーの「降板」が1206件、演劇・ミュージカル（舞台）の「降板」が178件である。テレビ番組・ドラマ・映画の役を降りる（辞める）ことなどを表す「降板」の数が、約9割を占めていることが見てとれる。

次に、“スポーツ、アウトドア、車”の分類では全3569件の内、スポーツの「降板」が3544件、アウトドアの「降板」が2件、車の「降板」が13件である⁴。さらに、“スポーツ”の小分類の内訳を見ると、野球（ソフトボールを含む）の試合の場面での「降板」が3443件、後の101件は様々なスポーツ（スポーツ全般）での転用である。

また、“ニュース、政治、国際情勢”の分類では、「降板」はニュースのアナウンサー・キャスターの「降板」が殆どであるが、首相などの役目から降りる（辞める）ことを表す「降板」が40件確認できた。

『Yahoo 知恵袋』において観察された「降板」の用法は以下に示す(A)～(D)のように分類できる。

(A) 野球の「降板」

以下の(5)では、「降板」は本来の意味・用法として使用されている。(5)では、試合中にヤクルトの館山投手が他の投手と交代したことを「降板」を用いて表している。

(5)＜質問＞：ヤクルトの館山さんが早めに降板しましたが、アクシデントですか？それとも、ただ調子が悪かったからですか？

＜回答＞：アクシデントでは無いです。5回2失点は館山にしてみたら不調ですからね。
不調だから変えたのだと思いますよ。

(detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1184976416)

また、以下の(6)では、本来の「投手の降板」ではなく、中日ドラゴンズというプロ野球の監督である落合氏が監督の役目から辞めることを「降板」で表現されている。この「監督の降板」は野球だけでなく、様々なスポーツの文脈においても用例が確認できる。

(6)中日落合監督降板は正しいか？

勝ちにこだわり、ファンに対してのサービスがなかった中日 落合監督の降板は正しいでしょうか？昔、巨人の川上監督はまさに勝ちにこだわりました。(…中略…)。今回の人事をどう読みますか？ (detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1071883510)

(B) スポーツ全般の分野における「降板」

まず以下の(7)では、バレーボールの文脈で、試合の途中で他の選手と交代したことを「降板」で表している。「降板」の本来の意味で野球以外のスポーツに使われる(7)のような「ある試合において他の選手と交代すること」を意味する「降板」はサッカーの文脈にも用例が確認できる。

(7)う～ん…、まだまだ息が合っていないですねえ…宇佐美の緊急降板は厳しいですね…今日は是が非でも勝ち点3が必要！！必ず勝ってくださいよね？

(detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1088645615)

次の、(8)と(9)では、サッカーの文脈で監督や審判がその役目から降りる・辞めることが「降

板」で表されている。

(8) <質問> : 誰か、サッカー日本代表監督に岡田を選んだ理由を教えて～(>_<)

<回答> : オシムさん病気で途中降板→海外主要監督は各国各クラブチームに就任済み→日本人監督で唯一 WC 経験監督であり、J での実績がある岡田さんに。

(detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1041301705)

(9) <質問> : リバプール vs サンダーランドでの珍ゴールのことなのですが、今スポーツを見てたら風船を投げ込んだリバプールサポーターの人にモザイクがかかっていました。やはりバレると危険なんですかね? (…後略)

<回答> : (前略…) 試合内容的にもリバプールが勝っているような試合ではないですし、終盤の優勝争いでもない、子どもが犯人ということで注意程度ですむのではないのでしょうか。ちなみに審判は次節の担当から降板、何らかの処分があるそうです。 (detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1031972495)

つづいて、(10)と(11)では、スポンサーとなる企業 (非人間) がその役目から降りることや、スキーの道具 (モノ) を他の新しい板と交換することを「降板」を用いて表している。

(10)タイガーがツアー復帰しますが、優勝すれば廻りの見方も変わってきますか?又、どれくらい活躍すれば元の状態まで人気も戻りますか?※スポンサー降板、あらゆる中傷論、ゴシップ記事ありましたが、活躍すれば企業はまた手のひらを返したようにタイガーに擦り寄ってくるでしょう? (detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1138277876)

(11)私は板は消耗品だと思って2~3シーズンでメインギアからは降板させることにしています。 (detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1022912365)

(C) エンターテインメントの分野における「降板」

まず(12)では、「降板」はテレビ番組 (ドラマ・アニメ・特撮)、テレビ CM、映画などで活躍していた俳優・キャラクターが役を続けずに (出演を) 辞めることを表している。

(12)相棒の寺脇康文降板理由について

ストーリー上の理由やリアリティを追求とあったのでてっきり殉職や失態を犯しての退職だと思ってたのですが、リアリティやストーリー上必要不可欠とも言えない状況での降板でした。 (detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1431314839)

つづいて、(13)では、「降板」はテレビ・ラジオのアナウンサー・ニュースキャスターなどの役目に就いている人が役目を続けずに辞めることを表している。

(13)NHK の渡邊佐和子アナ、おはよう日本は降板するようですが、地方局に異動になるのですか。 (detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1080837530)

また、(14)では、「降板」は演劇やミュージカルなどの舞台に登場する役者が役を続けずに辞めることを表している。

(14)神田沙也加さんが体調不良で今日初日の舞台を昨日**降板**しましたが。代役が豊田真穂さんに決定したそうです。(detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1095056585)

(D) 政治界での「降板」

(15)では、「降板」は首相などという政治界での重要な役職を続けずに辞めることを表している。

(15)首相公選制ってなぜ出来ないんですか?民主党政権も風前の灯だと思いますし、当然菅総理の**降板**は時間の問題ですがこんなに首相が変わることの問題意識はないのでしょうか。(detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1055025800)

『Yahoo 知恵袋』での「降板」は、(5)の本来の意味・用法の他に(6)~(15)のように、様々な文脈で使われており、「役目を(続けずに)辞めること」を表すという共通の意味用法が確認できる。

『Yahoo 知恵袋』は、不特定多数の読者に公開され、匿名の利用者同士の問答、文字媒体による対話として話し言葉的な運用も顕著であり、用語選択が比較的自由であるという条件を持つ。言葉の新しい意味・用法およびその一般化を観察するには実例が豊富で有用ではある。しかし、『Yahoo 知恵袋』という電子掲示板のサービスが開始されたのは2004年4月1日であるため、一般化の変遷を観察・把握することは難しい。したがって、次節では、新聞記事のデータベースを用いて「降板」がどのような一般化した意味・用法を有し、どのように出現してきたかを考察したい。

6. 新聞における「降板」の使用状況

本節では、朝日新聞データベースにおける「降板」の使用状況を観察する。朝日新聞の創刊号(1879(明治12)年)から1999年12月31日までの「降板」を調査した結果、「降板」の用例は2241件得られた。「降板」の出現件数を以下の図1と図2にまとめた。図1は朝日新聞の縮刷版と標準版のデータを合わせた1年毎の「降板」の出現件数を表すものであり、図2は朝日新聞の標準版における3年毎の「降板」の出現件数を表すものである。

図1 1年毎の「降板」の出現件数

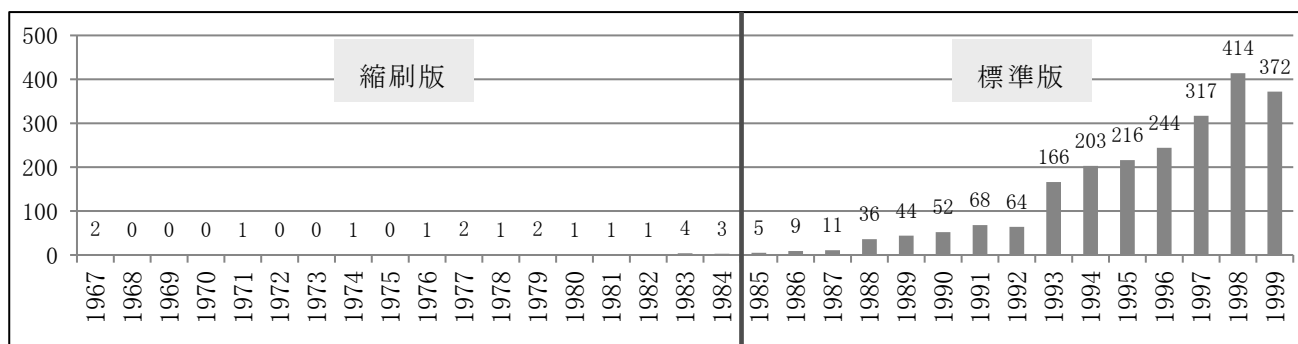
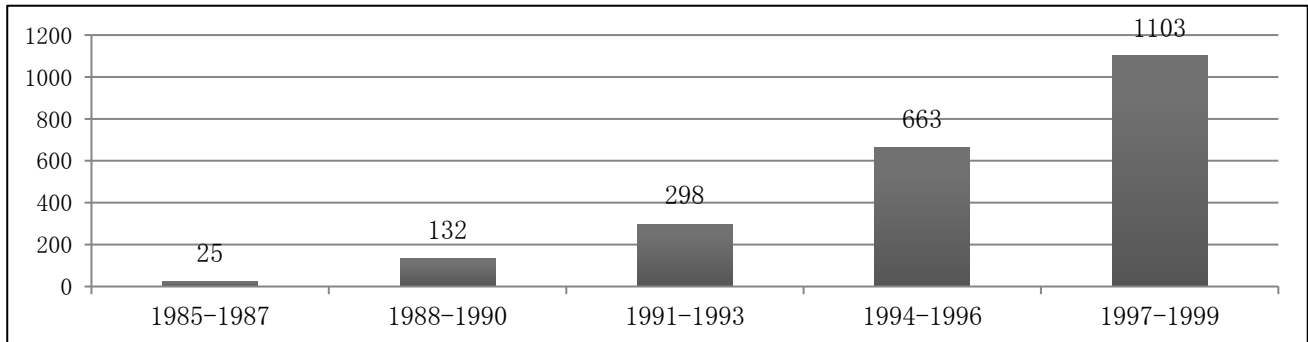


図 2 朝日新聞の標準版における3年毎の「降板」の出現件数



上の図 1 から分かるように、朝日新聞において「降板」がはじめて確認できたのは 1967（昭和 42）年の縮刷版の記事である。また、図 2 からは 1987 年までは用例数が少ないが、1988 年からは倍以上に増え、また、1993 年からは急増することが分かる。

次に、「降板」が本来の野球の文脈での意味・用法の他にどのような文脈に転用されているのか、各文脈において、いつ出現するのかを確認し、「降板」の一般化の変遷を検討したい。用例を検討した結果、「降板」が使用される分野・文脈は 5 つに分類できる。以下の表 2 を見てみよう。

表 2 分野別・年代別に見る「降板」の使用状況

出現順	分野・文脈	60年代	70年代	80年代	90年代	合計(%)
1	野球の試合(本来の意味)	2	7	76	1890	1975(88.13%)
2	政治	0	1	10	38	49(2.18%)
3	メディア・エンターテインメント	0	0	22	159	181(8.07%)
4	スポーツ全般	0	0	3	3	6(0.26%)
5	経済・経営	0	0	4	26	30(1.33%)
	合計	2	8	115	2116	2241(100%)

表 2 を見ると、「降板」は野球（本来の意味）の分野・文脈だけでなく、政治、メディア・エンターテインメント、スポーツ全般、経済・経営といった分野・文脈にも使用されていることが分かる。最も多く使用されるのは本来の意味を表す野球の文脈であり、全 2241 件の内、1975 件(88.13%)を占めている。つづいて、メディア・エンターテインメントの文脈では 181 件(8.07%)、政治の文脈では 49 件(2.18%)、経済・経営の文脈では 30 件(1.33%)、スポーツ全般の文脈では 6 件(0.26%)を占めている。以下の(A)～(E)では、各分野に出現した順に「降板」の記事を観察し、検討を行う。

(A) 本来の意味の「降板」

本来の意味の「降板」とは野球の試合の場面において、「投手が他の投手と交代してマウンドを降りること」を表す。朝日新聞において、「降板」がはじめて確認できたのは次の 1967（昭

和 42) 年 6 月 1 日の野球試合に関する記事の見出しである。

(16)村山 右腕に血行障害?4 回裏で無念の**降板**

4 回裏の守りについでに阪神の村山投手は五、六球ウォームアップすると、苦しそうな顔をしてマウンドからおりた。(…後略) (朝日新聞(朝刊)1967 年 6 月 1 日)

(16)では、阪神の村山投手が試合の途中で退き、交代した(「マウンドから降りた」という意味を表すために「降板」が使われている。

(B) 政治の「降板」

「降板」が本来(野球の投手)の文脈以外にはじめて確認できたのは以下の政治の場面に関する記事の見出しである。

(17)**降板**する市川総評議長 六年間のリリーフ役 前進した弱者救済・反公害闘争 (朝日新聞(朝刊)1976 年 7 月 23 日)

(17)の「降板」は、市川氏という人物が総評議長という役職を辞める(役職から降りる)ことを表現するために使われている。

(C) メディア・エンターテインメントの「降板」

メディア・エンターテインメントの文脈での「降板」がはじめて確認できたのは以下の朝日新聞(朝刊)1983 年 4 月 22 日の記事の見出しである。

(18)鈴木アナ当分 “**降板**” テレビ東京、脳出血で。 (朝日新聞(朝刊)1983 年 4 月 22 日)

(18)では、鈴木氏が脳出血のため、テレビ番組のアナウンサーとしての役目・出番から退くことが「降板」で表現されている。(18)では、「当分」という副詞が「降板」の前に使われていることが注目される。野球の試合では降板した投手は 2 度とマウンドに上がることはできないルールとなっているため、野球の文脈で「降板」の前に“しばらくの間”を意味する「当分」が使われることは考えられない。このことから、本来の意味を表す野球の試合場面での「降板」とは異なる意味を表すことがうかがえる。

メディア・エンターテインメントの文脈において、「降板」は(18)のアナウンサーという役目に限らず、テレビ又はラジオ番組の司会者、キャスター、ドラマや映画などの出演者がその役目から退く、降りることを表す際に使用される。例えば以下の用例である。

(19)10 月 2 日から始まる「お昼のマイテレビ」(月一金、正午)で、女優の萩尾みどりを女房役に、宮尾すすむが司会を務めることになった。同局の「モーニングショー」で 10 年にわたって「日本の社長」を紹介してきた宮尾は「寂しい気もするけれど、このへんで転身して違う宮尾を見ていただきたい」とほかのレギュラー番組もすべて**降板**するほどの心意気。 (朝日新聞(夕刊)1989 年 9 月 22 日)

(20)個性的な歯切れの良い口調で人気のあるフジテレビ系「スーパータイム」のニュースキャスター、幸田シャーマンさん(31)が、3月いっぱい降板することが、27日決まった。

(朝日新聞(朝刊)1988年1月28日)

(21)女優の藤谷美和子(24)が半年ぶりに24日、主演映画「この愛の物語」(舛田利雄監督)の製作発表に姿を現した。昨年5月、映画「キネマの天地」撮影中に監督の指示と合わず、表向き自分から降りて代役と交代。同10月にはTVドラマの収録中に演技が出来なくなり、途中で降板して以来のこと。(…後略) (朝日新聞(朝刊)1987年3月25日)

さらに、(18)~(21)のような「人物が役目から降りる(辞める)」を表す「降板」の用例の他に、人物ではないもの(非人間)が「役目から降りる」ことを擬人的に表す「降板」の用例も確認できた(22)。

(22)団らんの主役降板 質批判ふえる。

テレビの本放送が始まって30余年。一家に2台、3台も珍しくなくなった普及状態の中で、国民はテレビをどんなふう感じているのだろうか。7つの選択肢の中から選んでもらったら、「娯楽になる」が25%、「家族一緒に楽しめる」が2割と好意的な評価が上位を占めた。「くだらない番組が多い」「家族の対話が少なくなる」など批判的な評価は合わせて3割だった(問18)。

この質問は49年にも聞いているので、この11年間の変わりようをみると、「家族一緒に楽しめる」が31%から20%へと大きく減った半面、「くだらない番組が多い」が11%から19%に増えたのが目立つ。

かつて家族団らんの中心にあったテレビがその主役の座を降りたわけで、特に今、子どもを抱える世代の3、40代で、その減り方が大きい。「くだらない番組」という見方は40代以上では、2割を超え、49年調査より倍増している。(…後略)

(朝日新聞(朝刊)1986年1月3日)

(22)では、「主役降板」という見出しで用いられているが、テレビ番組に出演する人(主役)ではなく、「家族団らんの中心にあったテレビがその主役の座から降りた」という表現のように、テレビという物(メディア)が「家族団らんの中心という主な役割ではなくなる」という意味を表している。

(D) スポーツ全般の「降板」

スポーツ全般の「降板」とはスポーツ文脈での「降板」であるものの、本来の意味での「降板」と異なり、「野球の試合で投手がマウンドから降りること」を表さない「降板」である。スポーツ全般文脈での「降板」がはじめて確認できたのは以下の朝日新聞(朝刊)1986(昭和61)年4月3日の記事の見出しである。

(23)ヤクルト降板 プロ野球労組は早くもピンチ 強硬方針を敬遠

プロ野球選手の労働組合、日本プロ野球選手会(中畑清会長=巨人)に加盟しているヤクルト選手会の角富士夫会長は2日夜、神宮球場で記者会見して、ヤクルト選手会はプロ野球選手会を脱退すると発表した。(…後略) (朝日新聞(朝刊)1986年4月3日)

(23)の例文は、確かにスポーツ（野球）の文脈での「降板」であるが、本来の「投手の降板」を表すのではなく、ヤクルトというプロ野球チームにあるヤクルト選手会という組織がプロ野球選手会を脱退することを表している。(23)の「降板」は「人が役割から降りる・辞めること」ではなく、「組織（非人間）がより大きな組織から脱退すること」を表しており、意味的な拡張が認められる。

非人間の「降板」を表す(23)に対して、以下の(24)と(25)は人物の「降板」を表す用例であるが、やはり本来の意味用法とは異なっている。

(24)巨人軍の江川投手、引退を表明 現役9年で“**降板**”

プロ野球巨人の江川卓投手(32)が9日夜、今季限りで現役を引退したい意向を表明した。東京都新宿区内にある妻の実家で、引退の意思を聞かれ、「自分の気持ちは決まっております、考えが変わることはない」と述べた。巨人球団は全力で慰留に当たる構えだが、本人の決意が固いことから、翻意させるのは困難と見られる。プロ野球界のルールを無視した入団騒ぎの末、54年に巨人入りした江川は、現役9年間でユニホームを脱ぐことになる。(…後略) (朝日新聞(朝刊)1987年11月10日)

(25)東洋フライ級チャンピオン矢尾板貞雄は、ものの見事に引退した。その引き際は鮮やかで、感動すらおぼえた。(…中略…)

矢尾板の突然の降板により、世界挑戦資格（ランキング十位まで）がないファイティング原田（原田政彦）に出番が回ってきた。(…後略) (朝日新聞(朝刊)1999年2月15日)

(24)の「降板」はプロ野球の巨人軍の江川投手が現役を引退すること（ユニホームを脱ぐこと）を表している。つづいて、(25)の「降板」はボクシングの文脈において、東洋フライ級チャンピオン矢尾板貞雄氏がプロボクシングから引退することを表している。このように、スポーツ全般において、「降板」は「脱退すること」「引退すること」という意味を持つことも確認できる。

(E) 経済・経営の「降板」

経済・経営の分野において、「降板」は会社の社長などの役割・役職から退くことを表している。経済・経営文脈において、はじめて「降板」の使用が確認できたのは朝日新聞（朝刊）1987（昭和62）年7月2日の次の記事、本文中の用例である。

(26)東芝の渡里杉一郎社長は、辞任会見を終えた後、こうつぶやいた。妄想するなかれ、よけいなことを考えずにいちずに対処することを意味するこのことばに、子会社のココム違反事件の責任をとって、就任後わずか1年3カ月で**降板**する渡里社長の、自らが退くことで問題解決を願う思いが込められていたといえよう。(朝日新聞(朝刊)1987年7月2日)

(26)の用例は、社長という役職を退くことが「降板」で表現されている。つづいて、以下の用例を見てみよう。

(27)バブル破れ中止相次ぐ 九州・沖縄・山口のリゾート計画 【西部】

福岡県芦屋町のリゾート開発計画は14日、第3セクターに出資している三菱商事など民間6社が撤退意向を表明し、計画は宙に浮いた。九州・沖縄・山口地区はここ数年、空前のリゾートブームにわいていたが、一方ではバブル経済縮小の影響や用地取得の難航で、立ち消えとなる計画も相次いでいる。「芦屋」は福岡県が進めている玄海レク・リゾートの中心的事業だっただけに、リゾートを地域開発の核にしている市町村にも影響を与えそうだ。(…中略…)

町と民間39社の第3セクターが、150億円以上の事業費で、ゴルフ場やオートキャンプ場などを作る計画だったが、日商岩井が昨年末、幹事社を降板する意向を表明した。

(…後略)

(朝日新聞(朝刊)1992年4月15日)

(27)では、バブル経済縮小の影響や用地取得の難航という理由で、リゾート開発計画を進めている会社が相次いで撤退し、町と民間39社の第3セクターの幹事を担う会社(幹事社)が、その(幹事という)役目から降りることが「降板」を用いて表現されている。(27)の「降板」は、経済・経営の分野において、「(会社を経営する)人が役目から降りる・辞めること」ではなく、「会社という組織(非人間)が役目から降りること」を表しており、意味の拡張が認められる。

このように、経済・経営での「降板」は分野としての出現順はもっとも遅く、(分野のみ拡張しているものの)意味用法としても、本来の「役目・役職から降りる」という意味用法に限られる。ただし、人間のみならず組織(非人間)が主体となる用法は見られる。また、見出しではなく、記事本文での使用であることは注目できる。このことは、野球の投手に関する本来の意味以外の運用が、比喩としての意味用法から、定着し、一般化したことを示していると考えられる。

7.まとめと今後の課題

以上、本稿は「降板」の意味・用法の一般化・拡張について事例にもとづいて考察を行った。まず、一般の辞書の意味記述においても、「降板」の本来の意味・用法とともに一般化し拡張した意味・用法も取り上げられている事実から、「役を降りること」「担当していた役割を辞めること」を表す転用が日本語に定着していると考えられる。また、日常的なコミュニケーションが観察できる『Yahoo知恵袋』において、「降板」の一般化の傾向を見ると、「降板」は様々な分類・分野において転用されていることが確認できた。

次に、経年変化が見られる朝日新聞での使用状況を観察した結果、朝日新聞において、「降板」の用法には本来の意味である「野球の試合中に、投手がマウンドからおりること」のみならず、政治の「降板」、メディア・エンターテインメントの「降板」、スポーツ全般の「降板」、経済・経営の「降板」という5分類が確認できた。「降板」の出現についてまとめると、以下のような順になる。

1967年	1976年	1983年	1986年	1987年
→	→	→	→	→
〈野球〉	〈政治〉	〈メディア・エンターテインメント〉	〈スポーツ全般〉	〈経済・経営〉

以上で示したように、朝日新聞における「降板」は1967（昭和42）年6月1日の野球の試合の記事にはじめて確認できた。その後、政治の文脈に転用されてから、様々な文脈に一般化するようになったと結論づけることができる。この拡張のプロセスの端緒に、政治の文脈への転用（比喻としての「見出し」での運用）が見られる点は、同じ野球用語の「続投」と共通している（シギット 2016）⁵。一方、「スポーツ全般」での意味拡張（各試合・各役目に留まらず、組織としての「脱退」、選手としての「引退」を表す用法）に先駆けて、メディア・エンターテインメントの分野で新しい意味用法が見られる点は、「続投」とは異なっており、「降板」の特徴と言える⁶。本稿で観察した意味用法の一般化・拡張のプロセスを整理すると、以下のようになる。

① 本来の意味用法

＜（野球の）投手が＞ ＜〈一試合のピッチャーの〉役目から＞ ＜退く・辞める＞

② ＜人が＞ ＜〈ある範囲での〉特定の役目から＞ ＜退く・辞める＞

③ ＜非人間（モノ・組織）が＞ ＜〈ある範囲での〉特定の役目から＞ ＜退く・辞める＞

④ ＜人・組織が＞ ＜分野全体から完全に＞ ＜退く・辞める＞

最後に今後の課題を述べる。本稿では、「降板」の出現順と、意味拡張のプロセスを観察し、上記のような整理に至ったが、このような過程が「降板」に特有のものか、あるいは野球・スポーツ用語において一般的に見られる傾向であるのかについては考察が至らなかった。「降板」の用法の拡張が、野球、あるいはスポーツ用語の一般化において、どのように位置づけられるかを考察する必要がある。また野球の投手に関連する用語の内、意味・用法の一般化が見られるものとして、他に「続投」「継投」「登板」などが挙げられる。そのため、今後は「降板」のみならず、これらの用語の意味・用法の一般化についても考察し、これらの用語との関係について明らかにしたい。また、一般化の過程を詳しく把握するために、新聞記事などにおいて、比喻として表すことが多い見出しに出現するか、あるいは転用が自然にとけこんだかたちで本文に出現するかなど、どのような傾向で出現しているのかを詳細に観察したい。さらに、単独で使用されている場合と「途中降板」「続投論」「継投策」「再登板」などのような複合語として使用されている場合とで、文法的に異なったふるまいを見せる。よって、このような構成の相違も含めて、これらの用語を詳細に観察していきたい。

注

- (1) 『Yahoo! JAPAN知恵袋』とは、Yahoo! JAPANが運営する電子掲示板上で、利用者同士が知識や知恵を教え合うナレッジ・コミュニティ、知識検索サービスである（PHP研究所、2005）。

- (2) 本稿で扱う朝日新聞のデータベースは 1879 (明治 12)年 1 月から 1984 (昭和 59)年 12 月 31 日までが縮刷版、1985 (昭和 60)年 1 月 1 日から 1999 (平成 11)年 12 月 31 日までは標準版であり、縮刷版では見出しと記事内容に基づくキーワードのみが検索の対象範囲となる。縮刷版は、記事全文がデジタル化されておらず、見出しと、現代の編集者が付したキーワードのみが検索対象となる。標準版は、デジタル化されており、見出し・記事を含む全文が検索対象となる。縮刷版では必ずしもキーワードが記事の本文に使用されているとは限らないため、ヒットした見出しとキーワードに基づいて、実際の縮刷された記事のスキャンデータと照らし合わせて抽出した。縮刷版に対して、標準版は記載されたキーワードが記事内によるものであるため、検索結果から記事を確認し、抽出作業を行なった。縮刷版と標準版ではデータ量に大きく差があるが、「降板」に関しては、用例はほぼ標準版の範囲であり、結論に大きな影響はないと考える。
- (3) 表1の大分類は、『Yahoo 知恵袋』で設定されているものである。6 節で行う新聞データの観察で採用している表 2 の分野の分類 (新聞の面の分類に基づく) とは異なるが、本節ではインターネット上の記事で「降板」の意味・用法が一般化する分野の傾向を見るために便宜的に『Yahoo 知恵袋』の分類を参照する。
- (4) 『Yahoo 知恵袋』においては“アウトドア、車”という分類が“スポーツ”とともに一括りとされているが、実際に得られた用例は全て「自動車のテレビ CM の出演者の降板」と「アウトドア番組の出演者の降板」のように、エンターテインメントの分野における「降板」の転用と同様である (5 節の(C)を参照)。
- (5) シギット(2016)では、本稿の「降板」と同様にスポーツ用語の意味・用法の一般化を観察する研究の一環として野球用語「続投」の意味・用法の一般化について考察している。その意味・用法の拡張プロセスとして、「続投」は政治の文脈・分野に転用されてから、様々な文脈・分野に一般化するようになったと指摘している。しかし、「降板」とは異なり、「続投」では政治の文脈・分野での転用が最も多く見られる。
- (6) 「降板」の「板 (いた)」は、日本語では「(芝居の) 舞台」という解釈ができ、この意味合いが降板の意味用法の変化に関与しているという見方もあるかもしれない。『精選版日本国語大辞典』では、「板に付く」という語は「役者が経験を積んで、舞台にしっかりと調和する。また一般に、その仕事にも慣れていく様子。また態度などがよく似合う様子にもいう」と記載されている。しかし、「降板」の意味拡張に「俳優の降板」などというメディア・エンターテインメントの分野での意味・用法が特徴となることから、「降板」＝「板 (舞台) から降りること」という解釈に拠るか否か、検証は難しい。本稿の見解では、「降板」の「板」は「投手 (の) 板」であり、野球が伝来したアメリカ (英語) の “pitcher's plate” の日本語訳であると考えられる。つまり、翻訳の過程で「投手板から降りること」が「降板」と翻訳され、「板 (舞台) から降りること」に見立てやすいために、メディア・エンターテインメントの分野で一般化したのではないかと思われる。よって、本稿では、「降板」の意味用法の変化に「板 (舞台) から降りる」という解釈が関与しているという立場は採らない。

引用文献

シギット・スギアルト (Sigit Sugiarto) 「続投」の意味・用法の一般化『名古屋言語研究』第

十号、二十三～三十五頁、2016年。

榎山洋介「スポーツに由来する日常の言葉(1)―「野球」(その1)―」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第十四号、九十三～百二十三頁、2006年。

榎山洋介「スポーツに由来する日常の言葉(2)―「野球」(その2)―」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第十五号、百一～百二十三頁、2007年。

Yahoo! JAPAN・連結社編『みんなの「知恵袋」』PHP研究所、2005年。

引用辞典

日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典第2版』、小学館、2001年。

日本国語大辞典編集委員会小学館国語辞典編集部『精選版日本国語大辞典』、小学館、2006年
新村出編『広辞苑第六版』、岩波書店、2008年。

松村明『大辞泉第二版』小学館国語辞典編集部、2012年。

例文出典

朝日新聞記事データベース『聞蔵 II ビジュアル』(<http://database.asahi.com/library2/>)

『Yahoo! JAPAN 知恵袋』(<http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>)

